花房助兵衛

應仁以來みだれに亂れし世を閉ぢて一度こゝに關を据ゑんもの。そもや源平藤橘いつれの末の弓矢取ぞと思ひの外、神も知ろしめすまじ、尾州愛知郡の草叢より生れ出でたる土民の子、しかも身丈五尺に足らぬ猿面冠者、

されば四海の群雄を取ッて弄ぶこと落ちたる豆を拾ふが如く、天下の機に臨み變に應じて勢ひを制すること田樂法師の業に等しく、いつしか位は人臣を極めて豐臣朝臣秀吉の今日、そも〳〵何者の敵かあるべき、指を彈いて山河顚倒また心のまゝなる中にも、あはれ三國一の富士を脊負ひし小田原城のみ、敵といふ字をかざして待ち受けぬ、

ころしも天正十八年、なまなかの討手を立てゝ暇どらんよりは、みづから向うて老の

慰勞かたゞ〳〵、ついでに若き武者どもへ手本の一つ、二つには末世に殘す千軍萬馬の餘波、いざやとて玆に小田原征伐の大軍おこりぬ、

古今ふしぎの天下取を引き受けて一泡ふかせんと待ち構へたるほどの小田原城、いはゆる兵家の四神四應、ましてや關八州に響き渡りし累葉の武門とて、譜代恩顧の徒輩が今を必死の覺悟、ならば手柄に御覽ぜい、たとひ四面に楚歌の聲をきくとも、この矢倉の瓦一枚を碎かんには、名ある豐臣武者が五人の生命ぞ所望、濠の水一勺を乾さるゝまでには、聞えし上方腹三人の智慧袋破ッて來よと、城中しづまり返ッて十重に卷いたる雲霞の勢を野邊ふす春の草とや見るらん不敵さに、さすがの秀吉おもはず猿眼を開いて風前の燈火、釜中の魚類、いづれも叶はぬ生命の際にあはれ無用の膽を賣る奴かな、それならば此方にも分別あり、この城廓一つの遲速に依ッて取りし天下の我物に難易あるまじ、さらばゆる〳〵遠籌にかけて一蒸おもむろに蒸してくれんの陣

立とぞなりぬ、

丹樓昔日麗如霞、黃金爲瓦亦非奢とは、後の世に太閤の華奢をうたひし文士の想像、されば今まのあたり見る修羅の巷の城攻にも心は春の海の凪ぎたるが如く、忽ち三軍に休戰の令を布いて切所々々を守るの外は甲冑を脱がしめつゝ、幕下の大名小名に陣小屋あらため作ッて歌舞音曲を許し、こは思ひのまゝに妻妾侍婢を招かしめ、庭園の設置、茶の湯の好み、鞠のかゝり、圍碁の席、日夜の宴は固より詩歌連俳の座に至るまで、およそ百年の太平樂を此處に舞ひをさめんかと思ふばかりの寛體、ましてや秀吉みづから敵に臨んで豪奢を極めし屋形の結構は、聚樂の第にも劣らず、小田原城を眼下に西の高山なほも十餘丈の石を疊んで新に植ゑし竹石樹木の間より四十餘年の天下を靡けし金の截切十二枚の馬印、さながら空に金色の光輝を放ち、津々浦

浦の船こぐ奴さては里の巷に犬うつ童までも、鬼神あれかと四海を取ッて壓へし萠黃の吹貫十五本は千生瓢と共に春の霞を縫うて、西は酒匂の川を境に町家おしきり、梅澤より遠く大磯小磯かまくらの濱邊まで、東は山崎三枚橋をかぎりに日本一の富士を仰いで箱根足柄ふたごの山の翠を座興に添へつゝ、はるゞ大阪より招ぎし淀君の色に醉ひ、近く關八州を涉りし珍器名物を翫んで、げにや前代未聞の寛濶豪奢、かくても母の胎内より生まれ出でたる人間業かと疑はれぬ、

されば此の御大將の屋形を守る柵門の前、よしや如何なる魔王たりとも恐れて通ふまじきを、憫然いづれの雜兵が狼狽へて迷ひしやらん三四人、這ひ蹲ッて砂も舐らず陣笠そのまゝ物を脊負うて過ぎ行きし體、奇怪千萬ふしぎの奴と忽ち捕ッて縛首うち落されぬ、さても首になッたる雜兵の主は誰ぞ、

そのころ幕下の大名浮田秀家が客待遇の侍に、花房助兵衛とて世に聞えし大剛の勇

士あり、親もなく子もなく兄弟もなく、さては生れし故郷の名さへ人に語らぬ野中の一本杉、當年とッて三十二、おのが番所の柱によりて物の本を見たりしが、今しも朱塗槲の陣笠きたる雑兵三人しばり首に逢うたり罪は殿下の門前そのまゝ腰を伸ばして打通りしが故と聞くや否、手に持てる書を閑に閉ぢて起ち上りさま水を含んで口を漱ぎ、湯を汲んで面おしぬぐひ、袋鏡を取り出して武者男なほも眉目を整へながら、鎧櫃がらりと打ち開けて紺絲縅の大具足、太刀は赤銅づくりの大兼光、わざと前立はづせし平兜を眉庇ふかく頂いて忍びの緒を引きしむる體に、同じ番所の上置あづかるは中村家の侍大將に渡邊勘兵衛とて、これも世に唄はれし日本三勘兵衛の一人、おもはず眉を顰めて見上げながら、

「助兵衛どれへ參らるゝ、しかも當の番所をあけて俄に甲冑、おもしろい敵がな見えてか」

助兵衛おもむろに振り返りて笑を浮べながら、

「見えたぞ、見えたぞ」

「や、その敵は」

「弓矢八幡、武士冥利、敵は正しく殿下ぢや」

「えッ」

「お止めやるな勘殿、花房助兵衛さらに氣も狂はぬ、血も上らぬ、たとひ木葉に等しき雑兵なりとて味方の勢なりや殿下の御爲筋、まいて其の雑兵に御門前とも知らいで過ぎしと聞くに、しかも首となッたる三人は年ごろ勘兵衛が手鹽にかけし奴ども、雑兵の縛首さへ御座興となるならば、嗚呼なれど人に知られた花房助兵衛ほどの男が縛首なほさら忠義ぢや、一泡かまして馬を御門前に躍らし、殿下に痰はッかけて死晴の白癡を御覽に入れうまで、そこ退かれい勘殿、じたい此ごろの御振舞、負けざ

ればとて軍の陣立にあるべき事か、小唄まじりの戰爭に助兵衛が活動は勿體なし、同じうは今のうち、殿下を敵に取ッて一さし舞ふ分ぢや、骨となッたらば粉に碎いて陣所陣所に上を見まねの柔弱者へ幸ひの守り袋、友達甲斐ぢや勘殿、おぬしの手より分けて賜はれ」

幾度の戰場に伴うて助兵衛が心は知ッたり、勘兵衛もまた武者中の武者といはるゝもの、今更に止めもせず、起ッて背後より鎧の總角を取り直し兜の鍬を整へやりつゝ、

「助兵衛、さりとて不覺すな、打物とッての敵ぢやないぞよ」

「心得た、膽魂一つの業ぢや、勘殿さらば」

番所の口を走せ出づる後姿、天晴れ男を殺したりける、

助兵衛やをや厩の前に立ッて、ちよッ〳〵と舌鼓うちながら曳き出したる祕藏の逸物は、みづから牧の荒馬に繩手綱かけて仕上げたる七寸三分の薄栗毛、その名を夕顔といふ、

うらゝかなる春の空の刷毛際を建て聯ねたる家々の旗さしものに彩り、陣屋陣屋に立つ煙の末は遠く見渡す海山の景色に添うて、近く見おろす屋形の門前までも長閑き今日を立て籠らんは遺憾なり、さらばとて掛け出したる出丸の高櫓に上りて、秀吉みづから幔幕の蔭に座をおきつゝ、左右に居並ぶ恩顧の大小名と浮世譚に餘念なき折しも、南の方に一叢しげる森を小楯の番所裏より、鈴を亂すが如き轡の音かすかに響きぬ、何者ぞ、屋形まぢかに時ならぬと見渡せば、あらはれ出でたる眞黑の武者一騎、

さては誤ッて馬に乘せられたる不覺者かと思へば、さはなくて平兜の眉庇に小手をかけつゝ此方を見上げながら、笑を含むが如く肩に笑ふが如く一ゆすり鎧の上帶ゆすりあげたるまゝ、泥障を打つ兩の鳩胸ぱッ〳〵と鳴らすや否、嘶きあぐる栗毛の駒を公

いふ、

の松原あたりに手綱ひきしぼッて、細長く少女の叫ぶに似たる中音を引くかと聞けば、忽ち四個の蹄を躍らして大地に起る一團の砂煙より鞍上鞍下の人馬一體、もろともに天へ跳ねんの勢猛すさまじく、屋形の大門そのまゝ渦巻く土砂を蹴あげて乗打せんとする體に、番の兵おどろき馳せて一期の大音、

「けしかる振舞や、御門前なるぞ、乗りうち無用、乗りうち無用」

まのあたり疾風電霆の勢さッと止めば、人馬また一體こゝに刻める木像の如く、しづかに振り返りて冷かに笑ひながら、

「何が無用ぞ、およそ武士たるものが陣中馬上の往來、やをれ何が怪しかる振舞ぢや、御門前とは誰が居眠りの門口やらん、かくいふは音にも聞きつらう無雙の大剛者花房助兵衛まかり通る、いや兜も脱がぬぞ鞍壺に手も下さぬぞ、まいて鐵仕立の此の首骨いかな〳〵、折ッて善きものは無慈悲無體の根性ぢや」

死骨抛げ出して喚いたる不敵のありさまに、此奴さては狂者、ひきずりおろさんと番兵十餘人左右に競へば、助兵衛から〳〵と咽喉佛の飛び出でんばかりに大口あいて高笑ひ、

「おのれ等の分際で何をかするぞ、いのち入らずば近う寄れ、いのち惜しくば寄るな觸るな、男は萬夫の一人、馬は千里の龍駒、五體の皮肉ちり〴〵ぱッと散らうぞや」

叫びながら馬たてなほして櫓を仰ぎつゝ、幸ひ此ごろは風神に當ッて廣島名物の蠣に似たらん大の青痰、かッぷッと吐き上げたるまゝ、腰の軍扇ひらいて悠々と立去りぬ、天地を一揉みに揉み潰しても猶あきたらぬ活氣の秀吉、櫓の上より此體を見て堪るべきや、

「誰かある、誰かある、おッかけて彼奴きりすてい、馬もろとも餘すな」

うけたまはると起ッて馳せ行きしは堀尾茂助、

飛ぶが如く太刀ひッさげて馳せ出でし堀尾の影、秀吉じッと見ながら何をや思ひけん、また左右に眼を配ッて、

「誰かある、おッついて茂助を引き止めい、あれほどの廣言つら〳〵我に對うて吐いたは助兵衛さすがの奴ぢや、助けて腹を切らせい、せめて武士道の切腹させい」

はッと答へて起ちしは小姓の堀三十郎、

三十郎が起ちし後、秀吉また中啓をもて、自己が小膝を彈きながら、

「や、誰かある、三十郎を呼び戻せい、助兵衛は浮田の客分ときく、はゝゝゝ、ういう奴ぢや、をかしい男ぢや、今あの吐ッ掛けた青痰一個で二萬石たしかの價値、浮田を召して助兵衛に加增させい」

戰場にては、腐ッて梢を放れし熟柿に似たる雜兵の首も、陣中にては珠玉の如くに惜

んで、古今ふしぎの天下取に喧嘩ふッかけ、しかも痰まで吐きあげて死骨なげ出したる一片の武者氣質、天晴れ男は助兵衛と、扇子ひらいて四方より褒め立つれば、助兵衛から〳〵と笑うて、中にも親しき渡邊勘兵衛を見返りつゝ、あはれ今時の侍に似氣なき正直さよ、よく思うて見やれ、五百の味方を殺して敵城の二つ三つ乘ッ取ればとて一萬石にはむづかしの世の中に、幸ひの木葉首たッた三個を資金の大賭博、仕損じてからが日本一の敵手ぢや、運よく遣ッて退けたりや忽ち二萬石、方々どうでござると戲れたる不埒の段々いつしか殿下に聞えて、折角の二萬石わづか七日を措いて取上げられぬ、されど助兵衛さらに驚かず、とかく浮世は斯うしたものぢや、誰かあるあの二萬石よび戻せいと洒落ぬいたる一言、また傳へ聞えて元來おのれの五千石まで半知に削られ、二千五百石に鼻唄うたうて過しながらも、いざ戰場といへば十餘年以來とッたる大剛の名は落さず、昔のまゝの鬼の助兵衛、花房助兵衛、

落花狼藉

神も佛も御免なりませ、まかりつゝ出たは團の小平とて、浮世の月と花ざんざめく元禄の今こゝに、六尺ゆたかの身を持て餘して、骨の捨場所どこぞ善い墓場はあるまいかと、十八年以來の大眼玉ひからして不倶戴天の仇を覘ふが如く探しまはれど、廣き世界に此男の棺桶つくる白癡もなくて、ことし三十三の曉まで、其身そのまゝの男一貫、節分の豆とる毎に鬼のやうなる涙こぼしてあゝ嫌ぢや世の中は、

團の小平、さほどに入らぬ無用の生命ならば東西南北たるところに行き倒れて野末の犬の腹を肥すか、彷徨ふまでもなく忽ち飛び込んで池の鯰の餌食となるか、九年面壁の達磨を學び損ねて床板と共に腐りついても善き筈ながら、此奴おもひ外なる僭越過分の墓場を選んで、およそ我一命に代ふべきもの、戰國亂世ならぬ今の世には尋常の

武士が千人萬人おしかたまッても及ばぬほどの大事か、たゞしは天下取の面前に便々たる此腹を叩いて喧嘩口論ふッかけたる上の死晴か、國持大名七八人の身代と此腕一本を遣取の大賭博か、女ならば物の本に唄はるゝ古今の美人を赤裸にして三里の肉屏風を築き上げたる中央を、たゞ獨り鼻唄うたうて歩きたしと、白癡が寢惚けし夢のやうなる希望を抱いて求むればこそ、人斬庖丁の多き世の中に敵手もなくて、今の今まで生命は無事なれ、

詈葉尻の西國の方言あれば、いづれ箱根の山を彼方へ越えし化物の種ながら、絶えて生まれし本國故郷を人に語らず人にも問はれず、絲目の切れし奴凧ふはく〳〵と此のあづまの都に落ち來ッてより凡そ十年、親なし妻なし子なし友なし主もなく家來もなく、しのぶが岡の片廂くれたけの笹の根岸に一室どころの家を借りて、月に二匁の家賃を拂ひかねたる風情なけれど年に一度の笑顔を近處隣へ見せたる事もなく、朝起の水

に面と手先とを洗ふの外は十日二十日も湯に入らざれど四季をり〳〵の衣裳を更へて垢じみたる見苦しき體もなく、家の内に爐ありて火は熒けども男やもめに鍋釜の用なければ三度の食事を出でて喰ひ、もし雨ふれば脊戸の婆を傭うて買餅に腹こしらへたるまゝの高鼾、覺むれば壁に倚り膝を抱いて無調子の小唄投節に四隣を驚かしつゝ、晴るれば忽ち矢の如く飛び出して的もなき鐵砲玉の如く打出す脛の向き次第、時には二日三日も歸らぬことあり、また日に幾度の出入しげき事もありて、偖その姿を見れば町家の軒を舐めんばかりの大男、腰には野太刀に似たる大脇差をおしこみ、朱を注ぎしかと疑はるゝ磐大面には一文字の太眉に飛び出でたる大目玉、さては漆の如き左右の懸鬢いかめしく、おぼろ富士といふ大編笠に正平革の大巾着、糾緒枯蘭の大草履、すべて頭の天邊より足の爪頭まで大の字づくめに四角ばッたる斯大男を、團の小平とは何事ぞ、

太平とはいへ世は慶長元和を去ること遠からねば、徳川の流水いまだ底すむまでに清からで、大阪方の魂魄をうけついだる武者氣質なほ此處かしこに生き殘りて、草を敷き寢の太刀枕に昔の夢を呼び返す不敵者あり、大名になり損ねて尾羽うち枯らせし今の無念を時あらば死骨抛げ出して晴らさんとする曲者、さては祖父の怨恨を骨に刻み父が最後を肉に傳へて當代の隙を窺ふ野心の徒輩いづれも浪人の世を渡る業もなきまゝ、まづ眼前の斬取强盜は武士の常慣として、果ては將軍の膝下ともいはせず白晝大道を横行濶歩しての振舞に、時の大老より町奉行への嚴命、そも〳〵當世の武威權勢うすきに似たり、あまさず搦め取ッて取調の上、いち〳〵縛首遠流切腹追放の四段にせよとの内命を下しぬ、

花の中なる王でも君でも櫻は櫻、一度みた上さらに見たくもなし、春とはいへど我に於て何かあらん、うかれ調子の浮世の奴等ざはく〳〵の出歩く風情なほさらなり、さらば寢てくれべい、肱を枕に寢ながら窓越の霞を眺めて、うと〳〵と夢になるやならずやの境は人間の天上樂こゝにありと、火の消えたる爐の邊に澁茶一碗もなけれど片隅の貧乏徳利には前夜呑み餘したる酒五合ばかり、そのまゝ口より口への瀧うつして雫も殘さず、ころりと横に下手の大の字を描きぬ、

をりしも門口より、

「御用ッ」

團の小平やをら床板の拔けやせんかと思ふばかりに音させて寢返りながら、

「酒か、酒なりや今しも、飲んだばかりぢや」

をりしも脊門より、

「御用ッ」

家の前後左右より呼ぶ御用の聲、さては酒屋の御用にあらずと、むッくり起ち直ッて四邊を見まはせども人の影なし、はゝゝゝ近所の童どもが獨住みの我に戯れんとか可愛き奴、こゝへ來よかし、いや引れ入れて我より慰み遊ばんと、草履ひッかけ何心なく差出す面上を一撃、はッしと擊たるべき刹那に敵の腕首かへッて小平の手にあり、閃く如き大力の早業に引ッ攫んだるまゝ取ッて拋げ出すや否や、脊門の戸おし破ッて蝗のやうに飛び込み來るは正しく我を抑手の勢、

小平たちまち大脇差とッて、後飛びに爐を飛び越えたる壁に脊を凭せながら大目玉ぎろぎろ一文字の太眉を逆立てゝ、聲を出さず齒のみ現す憤怒の冷笑、

「おのれ等じたい我を何とぞ心得たる、浪々こそすれ團の小平とて、廣い天下に兎の毛の罪の覺えもない晴の男ぢやに、おやまちすな、人違ひばしすなよ、草屋なれど

借屋なれど住まば我が本城、川邊の亂杭めいたる其の脛節そのまゝ這ひ蹲ッて退けい、一歩なりとも進まば横に稻妻、利鎌の總刈ぢや、はッはッはッ御用の聲が可笑しいわ」

蛆蟲に等しき分際の奴原いち〳〵跳ね飛ばさんも面倒なり、一まくりに蹴倒して骨が夜鳴きの此の腕を試さんと思ひしが、いやまて、御用々々と呼ぶからは元來こやつ等の知らざること、さらば知る奴の面前に大口あいて一問答してくれん、ついでに墓場の穿鑿、もしや案外の善き穴みつけん便利もがなと、そのまゝ牽かれて出でしは當時威權の奉行が役宅、今は腰縄のみぞ憤怒の殘塊なりける、

みるから不群の大兵、胴膽の張り切ッたる面魂、なるほど怪力の早業は捕手の面々より聞くに及ばぬ骨格、いづれ其人ぞと奉行まづ心に目星をつけて態と靜に問ひ掛り

ぬ、

「こりや其方の姓名かたれ、生國いづれぞ、何を營業に世を渡る、年齡は幾何、つゝまば身の爲めならず、隱さば罪を重ぬるぞ、男は男、とられた後まで男を立てゝ言へ」

小平ふりあぐる面上に笑を含んで、夜著の袖に似たる上唇を舐めながら、

「名は團の小平とて當年三十三、もの心ついて後の生國は肥前ともいひ筑後とも申し、また或時は海を越えて周防とも、さて今この江戸に世渡りの業は不用の生命を捨てんがための墓場穿鑿、神もッて以上の儀は包まず隱さず斯くの通り」

「だまれ小平、人ひとりの生國に肥前筑後周防の三ケ國とは何たる癡言、また世渡りを生命の墓場穿鑿とは、汝じたい狂氣ばし爲をッたか、うろたへたか血迷うたか、こゝを何處と心得る、物に容赦のない庭ぞ」

「いや、生みの雙親の名さへ知らいで捨子の野生育、ぢやに依ッて儿その國を先づ三ケ國、團の小平といふも我みづから我を呼ぶための姓名、妻もなく子もなく友もなく親戚もなければ、今も御邊が呼ばるゝ如く、狂氣でもなし狼狽者でなし、また三十三の年齢も確然とは答へがたし」年々たゞ鏡に對うて面がまちの出來按排で知るのみの見當、さて生命の墓場穿鑿を世渡りの業とは、仔細あッて聊か語ること無用、よし語ッてからが世上なみ〳〵の人には解しかぬる次第」

「小平、先刻よりの申立は、おのれの本心か、本氣の沙汰か、まづ其事を佛神に誓ッて」

「佛神に誓文なくとも本心本氣、そも〳〵何が面白さに虚言を申すべきか、親重代の名でなけれど團の小平は日本國に一人の男、生命より惜しう御坐るわ」

「それほど惜しき汝の名なれば猶更のこと、天下の奉行が不審うッたる墓場詮議の

仔細、つぶさに語れ、かたらずば名と共に許さぬぞよ骨を粉にしても」

「はゝゝゝゝ、十八年以來さがしぬいたる希望の墓場に得當らず、おもはぬ御邊の手にかゝッて骨となるも運命なりや何とせう、いざ粉にし給へ、幸ひ彼岸の團子には古今にあるまじい妙味ぢや、將軍殿にも一つ二つ武運長久のため獻じられい、はゝゝゝゝ團の小平が團子の粉となッた小唄が後に殘らんまで、はゝゝゝゝさても今日の可笑しさよ」

「小平、それも本氣か、本氣ならば汝が言ふ通りの最後ぞ、後悔すな」

「本氣、本氣、ずンと本氣ぢや」

すかせども、をどせども、說けども諭せども、打てど懲せど責むればとて、墓場詮議の仔細さらに言はねば、そのまゝ牢獄に押し籠められて一年この世からなる地獄の後、

再び引き出されて責め問はれし時しも、いとゞ以前に優る悪口雑言の外、奉行が問に一言の返辭もなく、果ては持て餘されて、八丈ケ島へ遠流の身となりぬ、

石川五右衛門

遠き昔に及ばず後の世の凡例は知らず、今この天下を我物にして武家の棟梁と仰がる豐臣太閤なるもの、そもや最初は峰須賀小六の下に追ひ使はれて盜賊根性を養ひ、織田信長の草履攝みを發端に生命を賭けし横道もの、いよ〳〵長じて、ます〳〵伸ばす手先に木下藤吉郎といふ我や祖先の侍品を盜み、草屋生育の小猿が身には過分の出世うれしとも思はず、あかぬ隴蜀の道序に柴田と丹羽と二人が名まで手にかけて、羽柴と盜んだる汝れ筑前秀吉、江州長濱の城を三寸の舌端に盜んで猶飽き足らずや主の信長が心を奪ひ、西の空なる毛利の庫中を覘うて眞一文字に斷けたる其あとに明智光秀といふ我には脛の劣りし盜賊が脊負つて遁げたる風呂敷包み、やらぬとばかり馳せ戻り追ひ掛けての二重盜賊、果ては天下の大名小名を奪うて自己が腰巾著に投げ込み、

國家の安危如何と小首を捻る奇怪の振舞、前代未聞の大盜とやいはん不群不逞の奸毒とやいはん、さるを今この日の本に盜む物なければ、現世の名殘り老の餘命の働きをさめ、冥途の旅の語り草とや三韓までも手をかけての荒稼ぎ、尊し辱しと這ひ蹲ッて敬ひ仕へる徒輩は素より論なき奴原、こゝの道理を悟らず知らず我この石川五右衞門といふ慾淺き男を、何事ぞ國の鼠に比して津々浦々までも骨相の繪圖を配布し、搜し捕へて强奪夜盜の成敗せんとは笑止千萬、よしや人命絶ちし罪障を數ふるならば、まづおのれ等が主從の身を洗うてこそ、この五右衞門そも〳〵十六の年に斧ふりあげて伯父伯母夫婦の頭を割りしより、今年四十二の曉に至るまで人を殺せし男女の數は僅に九十六人、うまれて春夏秋冬四季に四人を殺すとするも、けふの今まで猶七十二人の不足はあり、さるを彼奴太閤が生涯に作りし亡魂果して幾何ぞ、萬石とッて桃山殿の廊下に額を擦る奴とても、たしかに百人以上の血を流したる曲物、ましてや靑

天白日の恐れもなく要害堅固を破ッて修羅に等しき吶喊水火の大盜、我はこれ盜むべき人の油斷に波風騷がで盜み拾ふ盜賊、いづれか重き、いづれか輕き、さても世は逆倒なりけりと此ごろの嚴しき詮議に京都を落ちて攝州半國を暴し、住吉の松原に向ひし捕手を斬ッて危き生命を助かり、和泉に徘徊うて日根の奥に潛みしが、さすが不敵の强盜も月雪花を逆に見られず、順にめぐりて今年の初秋そよと吹く風寒きに、犬鳴山の麓より谷川の濱邊に忍び出で、いざや取り殘せし南海道の初指、山深けれど人里多き紀の國に賣茶の商賈となッて覘ひ行きぬ、

名草の郡和歌山の町に茶を賣ッて覘ひしが、いづこの里も蜑が汲む汐より辛き戰國の慣ひ、われ石川五右衞門が忍び入るほどの財寶なければ、これも彼奴大盜人に吸ひ上げられたる殘杯の餘滴、咽喉を濕すにも足らじと甘味からぬ舌鼓うッて、一夜ひそかに矜羯羅堂の橫道に待ち受け、來る奴ふびんながらも天運もろき白刃の錆、成佛とや

らん、念佛とやらん、極樂地獄の行き次第と旅裝の阿爺を斬ッて懷中を探り、驚き泣いて逃げ迷ふは夜目にも美はしき女、父に引かれて誰を尋ねん草枕あはれともいはず搔い攫み捻ぢ伏せて、空てる星を便りに三界汚辱の逆慾を思ふまゝに慰み、むざんや其まゝ淵に拋げて立歸りしが、わづかなれども半月の酒色に足るべき嚢中、底の縫目の破るゝまでも歡樂極めて、つくれば又もや湧き出づる鬼畜の惡性、もはや一人二人の血を見て取るも面白からず、さても我れ生涯の華奢に餘らん事もがなと心の鬼の顏色に出でねば、うまれながらに色白く眼涼しき小兵の五右衞門、旅宿にかゝりて秋の夜長の枕に飽きし折しも、障子を隔てゝ聞ゆるは高野下山の旅人とおぼしく、われ〳〵現世に斯く生涯のおもひでを果して、大慈大悲の本願たる靈跡に參りしからは彼世の成佛疑ひなし、さるにても彼の蓮華は世に高き黃金の雨曝し、あゝ見れば思へば佛界に慾なき證據は、鋤鍬とッて其日々々の生命を繫ぐ我々が眼にも、勿體なしと思は

ねば不思議とも見ぬ有難さ、南無大師と念じて語るを小耳に挿みし不敵の强盜、枕頭の燈火ふッと吹き消して鼾聲雷の如し、

千年の稱揚讃佛、不斷の歌唄頌德、四種三密の權者も常山に住んで猶ほ觀念の窓に養ひ、三聚淨戒の硯學が衣の袖を聯ねて物の數ならねば、浮世を吹き曝す澆漓の風たえて送らず、徧に修因感果の雲たてこめて、見上ぐれば蓮華に似たる山また山の頂上に、長者の萬燈むなしく松華の朝の嵐に消され、貧者の一燈ながく荷葉の秋の霜に輝く、歩んで上らん數は四里に足らねど、攀ぢて及ばん心は俗界の億萬里、よしや遠蠻の猛獸を放つとも、何處の巖の小蔭に牙や鳴らさん、よしや魔水の惡魚を放つとも、いづこの瀧の壺にや躍らん、一山の草木も悉く觀法の定座と覺えて、眞實に斯世からなる示現の靈場、高野の山の巖角に散り敷く秋の木葉を、何事ぞ穢辱の踵に踏んでザクザクと音させつゝ、空てる星を便りに寂寞無聲の境を我たゞ獨り、豆の如き五體を動

かして上りくる人間そも何者ぞ、前代未聞の曲物、その名を石川五右衞門といふ、三寶の難物わが國に入りて空海といへる不所存者あらはれ出で、もろき天下の人心を嚇して方便とやらにん開きし當山、空に紫雲も靉かねば地に蓮華の降るも見ず、草は雜草、樹は駄木、事も呵しや何の仔細あらんと、黑絹の頭巾もて頭を包み、穢土粘著の麻の草鞋を踏み占め、いくその人の生命を斷ちし三尺の太刀、いかなる世の鐵壁も破らん九寸の手鍵、女人堂の壇緣に腰うちかけては催すまゝの溺を恣にし、經卷堂を土足に踏み荒しては腰糧なる魚肉に腹を肥し、曉けぬうちにと杉の枝を折ッて杖にかへ見上ぐる阪の荆棘薜蘿を蹴飛ばして九折の嶽を一散に駈け出す不敵の健脚、眞逆樣に落ちもせず順路にのぼり〳〵て、坊門を見返り寺家を打ち越え、猿の如く傳うて入りしは音にきく高野の山の奥の院なり、佛陀の化身と聞えし大師が入定の靈跡、俗身汚血の五右衞門はゞかりもなく踏み入ッ

て見まはせば、まことや生ひ茂りて露も漏れざる樹下闇に、わづかの星明をうけて四邊に輝く黃金の蓮華、幾星霜の雨ざらしとは勿體なし、我奪ひ取ッて生涯を安樂に送らば、せめて人を助くる佛德にも叶はん、この山奥に埋めて何の詮かある、空海もし靈あらば今盜まんず我腕の筋骨裂いて不具にせよ、さても笑止の賣僧が祖先、眼前に踏躪ッて盜賊の怖ろしさを知らせんと、壇階に足ふみかけ猿臂を伸ばして輝く蓮華の莖を摑み、えいと曳けども動かばこそ磐石の鐵臺、うぬとばかり舌鼓うッて手鍵を取り出し、今や根本より捻ぢ斷らんとするも、衿頸の只中へポトリと物おつる心地して忽ち總身ぞッと肌寒し、五右衞門おもはず震へ上ッて五體を縮めながら、こゝろみに掌をもて探れば南無三、露なり、さても露なり、風にゆられて木の葉の衣露おちたりけり、あたら膽潰せしと又もや立掛る折しも、うしろの方より我を呼ぶ聲かすかに聞えぬ、はッと驚き飛び退ッて大地に丸く身を屈め、振り返り伏しつゝ額越に見透

せば影もなく音もなし、えゝ我ながら無念、いつしか脆く引き込まれたり、この深夜この深山に何物の來べき、よし來ればとて人間獸類おそるゝに足らずと、また歩み出せば又よびいだす我名の五右衛門、ふしぎと小耳を欹てゝ靜に聽けば、ごろう〳〵と啼く鳥の音は傳へきく佛法僧と唄ふ鳥、おのれ塒の夢さめてか翼ちゞめて拂曉待て、いざや金輪奈落の底までも掘ッて取らずば歸らぬ我と、再び立掛ッテ手鍵を振り上げ息を殺して斜めに打ッたる拳の狂ひか、あやまッて自己の右の脛にグサと打ち込みぬ、おもはずウンと叫んで轉び落ちしが、不敵の根性さらに事ともせず、流るゝ血汐に草鞋を染めて其まゝ又もや飛び掛らんとせしに、千年の苔むして滑かに黑みわたり、段階の上、いぶかしや白き斑紋の俄に浮びしはと、打屈まりて取らんとすれば忽ち我手の甲に移りきて、觸るに物なき眞白の影、さてはと仰ぎ見れば、いつしか樹間を漏れし秋の夜長の有明月、下ふき寄する風おともなく脚下より身に沁みて、はら〳〵と散

り來る木の葉に輕く額をうたれぬ、

吐き出す唾には草も枯れなん殘忍不敵の奸盜ながら、父と母とを持ちて此世に生れ出でたる人間、もとより人肉を屠り生血を啜ッて常食とせねば、六尺五體の働きも心一重の隔離とかや、されば今この深夜に流るゝ水も止み、踏む大地さへ音なき天地の睡眠に我たゞ獨り、小豆の如き兩眼ひらいて朝露に等しき榮華を取らんとせしが、萬籟聲なき千古の靈跡に思はず肌寒き身一つを置いて、いづこよりか誘ひくる無常の悲哀に骨ぞッと震ひ、みあぐれば樹間を漏るゝ有明の月これや眞如の影ぞと照らされて、額に散り來る秋の枯葉は一枚二枚と多年の我罪業を數へられ、さすがに怖ろしき盜心やゝ弛みて頭を垂るれば、右の脛より淋漓と流れ出づる血汐の俄に疼痛を覺えて堪へ難く、あゝ我とても薄き皮一重を破りては斯らん脆さ、おもへば明日をも待たぬ果敢なき人の生命と、鬼畜に等しき十二年の奸毒おもはずこゝに覺めて、ふきくる風に頭髪

の毛際を絞ッて宙に吊らるゝ心地、我にもあらず兩足踏み占むれは忽ちまた脛の疼痛に驚き、よろ〳〵と倒れかゝりて撞と突き當りしを何ぞと振り返れば、今の今までも心付かざりし一宇の建堂、立寄りて差覗けば軒もる月に照らされて白く累々と積み重なりしは人間の死骨なり、さては聞きにし高野の奥の骨堂、あはれ本の露末の雫いづれか後れ、いづれか先だてど遂に免れぬ北邙一片の煙と失せて、朝の花顔むれしく夕の白骨、皆この堂に集りて山なす現狀のさても淺ましや我もまた百年を保たぬ生命、死すべき身なれど、現世に積みし罪惡かくまで深きが故に、よしや刑戮を免るゝとも野末の草に斃れて、いかなる犬の腹を肥さん、誰あはれとて手向の水をうくべきものなければ、せめて今眼前に生きたる齒骨を納めて、けふの曉に覺めたる夢の我懺悔、あゝ過てり何事も後れたりと、小石を拾うて右の拳を握りつゝ、左手に自己が唇を押開き、仰いで一聲えいと打ち碎けば、ガクリと音して血糊もろとも落ちたる前齒三枚、

袖に拭ひ掌に上せて生涯に一遍の念佛ゆるし給へや、積惡の我れ石川五右衛門、死に至るまで再び唱へまじと念じつゝ、からりと骨堂に抛げ入れて、

高野山法の嵐のはげしくて
このはをおとす冬の夜の空

有明の月おちて霜白き曉の奥の院に、古今無雙の大盜かく詠じて暫し兩眼を閉ぢぬ、

水巴

うつりゆく世の慣、かはりゆく人の常、桑田碧海の凡例を引くほどにはあらねど、今ぞ東京の七分は俄出世の田舎者に占められて、あはれ生粋の江戸ッ子は殘る三分の玉川上水に咬へ揚枝の勢ひもつゞかず、いつしか川を越えて深川本所の場末に落ち込みつゝ、すぎし榮華を夢と見て其日の細き煙も立ち兼ねながら、なほ宵越しの錢を持たずに拜み搗きの米を喰ふ蟲は割下水の邊に住むとぞ聞く、その本所の奥ふかき柳島に渾名を三杯酸の勘助とて、花は昔に今は皺くちやの梅干老爺なれど、將に絶えなんとする江戸ッ子の總仕舞を一人で脊負ひ込みし古兵ありける、

勘助老爺ことし人間の定命に十八年も浮世を盗んで、七十の坂には僅二年の老體ながら、醫者と野暮とは大の禁物とて藥一ぷく呑んだ事なく愚癡一つ滾した事なく、この柳

島に住み込んでより幾年の春秋、兩國橋を渡れば萬事小癪に觸ッて堪忍ならずと、京橋邊に立派の親類緣者ありながら更に訪ひもせず、日本橋に四十の上越す子息の家あッて月々の養老料を受けながら曾て歸りしことなく、捨處もなき御殿女中の化けさうなる古女房を飯炊婆に傭うて、何事ぞ宿なしの乞丐より拾ひあげたる十五の小僧を味噌醤油の通路に追ひ使ひつゝ、近き妙見堂の鉦の音を朝夕〳〵けども無常を感ぜず、たゞ年々の手に取る如き龜井戸の春、まつ臥龍梅の魁に鼻ひこつかせて昔しのぶの藤紫に眼を喜ばせ秋は一しほ萩寺の蟲の音に耳を澄まし、さては窓より射し入る月に對うて小唄なげぶし、冬は吾嬬の森の雪を眺めて湯豆腐の獨酌、今時の生若い唐變木に乃公の相手がなるものかと、鎌倉の初鰹を見遁したことなく、鯛の杉燒にも海濱の詮議きびしく、佃の白魚を一尾づゝ空に透かして曇なきを選び、茄子とて拇指の腹ほどなるを殘んの前齒に味うて酒は酒で燗するものと心得、飯は鬼の金齒の一粒選二升

釜の眞只中に頭揃へて立ッたる邊を掘拔井戸に掬ひあげ、香の物は年中の膳に三國かけての名物五品を下らず、内風呂の朝湯に木綿着の肌を知らず、金の薄張煙管に國分の一本生ばッと吹かして、つがもねェ誰だと思ふ江戸傳來の伊達と生粹の墓場に殘ッた乃公樣の前に、きたねェ〳〵臟腑の腐ッた當世野郎め、くせエぞ臭エぞ牛馬かッくらッた其盥口、しやッ面あらうて出直せとばかりに、夜半の寢言の大聲いつしか近所に聞えて、狂氣老爺の風評たかくなりぬ、

こゝにまた萬事當世めいたる若盛りの三人男、一人は都下で一二を爭ふ洋酒問屋の次男、一人は室内裝飾品の大販賣を伯父に持ッたる僥倖者、いま一人は銀行頭取の一粒種、いづれも末の流れは知らず眼前の榮華に誇ッて血氣の放蕩仲間、しかも色男の守札はこれから出ますと大手を振ッて、北廓南品さては新柳の二橋を荒しぬいたる傍ら、

玉突の自慢にも飽き競馬の熱も冷め寫眞も古く銃獵の期も過ぎぬ、さりとて大道の砂埃を浴びながら無用の遠出に汗びッしよりの自轉車でもあるまいと、貧の盜賊と首縊りの絶え間なき今日このごろに額を鳩めて金の捨場の穿鑿三昧、あゝでもない斯うでもないの果が船遊びとなりぬ、

されど品川の海は俗なり、大森羽田の沖は聊か遠し、水にうつる青葉に棹さしながら水神の森影に味をやるなどは通常一般いつにても成る業、それよりは幸ひ秋にあらねど今夜の滿月に春と夏との夜網は如何に、川狩の薄鍋かけての醉心地また一興ならんといへば、おもはず手を拍ッて名案々々、ついでに聞き及ぶ本所の奥の柳島に三杯酸の勘助とやら、あいつ江戸生醉の總仕舞と吐して巾著の皺口に今に我等を嘲る老耄、おびきいだして船底に醉ひ潰し三方より圍んで古今の通を競べた上、彼奴もし文句に詰らば豫て死んでも嫌ときく牛乳の湯に叩き入れ、羊の生血を飲まし洋服きせて銀座

の中央へ引き摺り出し、市中音樂隊を總傭ひにして現世の引導わたしくれんと、三人いづれも手を拍ッて出來たくと叫びぬ、

春と夏との間の月、しかも十五夜の滿月たかく冴えて、黃金を碎く水の面に棹さしつつ、今なほ殘る形見の首尾の松影こゝら邊りと船寄せて見渡せば、はや更け行く對岸の家々いつしか夢に入りて、南に畫き渡る兩國橋も眠り、百本杭に打寄する上汐の音かすかに、柳橋の畫樓簾內に燈火ちらほら漏るゝも憎し、北は厩橋を隔てゝ空に描く薄墨の待乳の森、さて其奧は唯ぼッとして、水やら雲やら煙やら、知れぬところが十千萬兩、罪も報いも疝氣もあるものかと、例の三人が勘助老爺を中に取圍んで、そもく今と昔の此景色どうで御坐ると問へば、老爺ふゝンと鼻で笑うて背後に聳ゆる電燈會者の煙突を指さしながら、あンなものが立ッた世の中に善いも惡いも無用の沙汰、ま

づそれよりは今夜の御馳走、一網さッと入れて鯉は今昔なしの隅田川、その男魚の生肉を酸味噌で賞翫したいぞと吐しぬ、

はや三人いづれも小癪に觸ッて、さらば老爺殿の所望まづ一網打ち込んで後の事と、この川筋に名を得たる漁夫二人が、かはるく月代に水の面を見定めて、うてどもく何とかしけん小鮒一尾もかゝらず雜魚の死骸も上らず、さても不思議や、たとひ土の上でも何か入れずばおかぬ筈の我等が網と、なほも勢ひ込ひで打てば打つほどの不器量に、先刻より咬へ煙管の勘助老爺はゝと笑うて、おけく、なンのこッたい、又手網で腰ぎり浸ッて蛙子を掬ふぐらるが手柄の腕で、時もあらうに底に沈んだ月夜鯉、うかくおぬしなンどの手にかゝッて堪るもンかい、そこ退け乃公が一番やッてみせるわ、ついでに三人の衆も聞きなせエ、昔とッた杵柄の放蕩者はね、今時の駈け出し二才と違ッて何事にも資本を入れたもンさ、かりにも舟で一杯呑まうといふ男に網の

打てねエ奴ァなかッたもンよ、おい奴、その網かしなと手に取ッて舳に立ち上り、老の眼を定めて水色じッと見込みつゝ、よいしよの一聲さッと投げ込みながら、おッ静に、いひつゝ絞ッて引き揚ぐれば、折しも空照り渡る月影にきらりと白く光りしもの、いづれも打ち寄ッて見れば魚にはあらで三味線の撥なりける、

網にかゝッて川より上るもの、魚の外には石瓦、埋木の枝、難船の世帯道具、さては小むづかしい仔細ありげの劍か乃至うらみの死骸か心中の片相手か、ところがらの河筋なれば黄金の御像でなくとも、せめて今戸燒の觀世音でもあることか、三味線の撥とは古今ふしぎの拾ひ物、しかも幾年の水に揉まれ底に沈んで、これほどまでに薄くなせたる象牙の撥、あはれ何者の手より何として流せしぞ、すぎし昔の其主が思はれてゆかしいやら物凄いやら總身に徹へて味な氣になッたといへば、たゞ兩腕くんで無言の勘助老爺、此時おもはず老の溜涙ぽろ〳〵と滾しぬ、

三人いづれも眉を顰めて、老爺殿なぜ泣くと聞けば、勘助いよ〳〵涙を呑んで、空照る月に拾ひあげたる撥を透かし見ながら、小唄まじりに謠ふが如く呟くが如く、

どうせ流れの末ぢやもの、むかし逢瀬の其時よりは、痩せて見違ふ顔かたち、思ひ察して下しやンせ、泣いたが無理か、この涙、

三人の衆、きいて下せエ、ふしぎの事もあればあるものよ、ところも變らぬ首尾の松で、月さへ恰度このまゝに二十八年前、こりやァ乃公が情婦の形見でさァね、それが流れて海へも出ず解けて泥にもならずさ、今うッた網にかゝッて生き殘る男の手に戻るたァ、南無阿彌陀佛、あゝ滿足だ、南無阿彌陀佛、

月たかく夜は更けて汐さへ睡る眞夜中に、おもひもよらぬ水底より三味線の撥、しかも老爺が念佛の聲に流石の三人かねての氣焔も何處へやら總身ぞッと寒く船底に押固まッて心は陰に閉ぢられながら、わざと外面は陽氣の膝頭ぽンと叩きぬ、や、意氣筋

の本家本元、むかし色男の開山、そもやそも誓文なんく〳〵の仔細ありげな其品の因縁聞きたい聽きたいと詰め寄れば、勘助老爺こゝぞと涙を拭うて老の身を反しぬ、お談し申せば長いこと、されば搔つまんでの物語、そも〳〵我等むかしの情遊といへば、今時のやうに膝ツきり磯せゝりの淺い事にはあらで、最初から沖へ一文字に名乘りかけての大泳ぎ、もとより地女に眼はかけず、そンじよ其處等の者でも何でも先方から來る女は見向きもせず、萬事くわッとしたる伊達と寛活の意氣地とを表面に、添うての浮名と死しての心中を內情の眞實に、戀は曲物その曲物と飽くまで引ッ組んで、千兩の角屋敷を一夜に潰すは初心のうち、やがて手の屆くだけ親類緣者を泣かした上、もとより久離きッての勘當は斯道の一里塚、されば親兄弟に見放され、あかの他人の傾城に可愛がらるゝ紙衣の末と、小唄に上るが廓の本色、また其ころ柳橋あたりの音じめと來ては、色よりも香で持つ戀の筋骨、酒の上の三味線きくばかりは誰に

もなるが、鬢の毛一筋を亂さすまでには、いかな〳〵痩せた腕では叶はぬこと、また敵手も一途に男の中の男を選んで、町の素人にこそ三十女の處女は無けれ、當時それしやの中には四十島田で男の肌知らぬ女、嘘ぢや御坐らぬ、全く珍らしからぬ證據には金よりも心が大事、生命よりも名が大切、これを思へば三味線まくらに溝板藝妓の今の轉び寢、あゝ聞きたくも見たくもない、むかし材木海岸の夜鷹にも劣ッて、黑板塀の節穴同然、何が面白くて狂ふやら遊ぶやら臍茶の至極、ふざけた骨頂、こゝらが野暮の路地口ゆきどまりと笑ひぬ、

三人いつしか言葉の綾に引かれて耳澄ませしが、さしあたる撥の由來、何ともいはねば膝を進めて、老爺々々、吹かるゝよりは語ッて欲しい山々、そろ〳〵麓際から願ひまするといへば、勘助ぐッと呑み込んで、元來これほどの序幕なうては聞かされぬ本色だ、さらばとて煙草一ぷく、

さて思ひ出すも涙の種ながら、後學のため男冥利に聞いておかッせエ、そのころ柳橋に蔦屋の小三とて江戸藝妓の手本に出來た本尊一體、兎の毛の末でも缺けた點があれば埋め合はせの褒め言葉も入れど、これほどの女に容貌と藝をいふだけ無用、十四の年から色の相場を狂はし始めて、二十七の若葉ふき添ふ中年增まで、十三年の其間びくとも動かぬ此敵を、二十八の曉に忽然ゆら〳〵と搖り動かして、果は一身むらむらぱッと立つ鳥の翼にも似た車輪の色氣を持たせた奴、そもや誰だと思ふ外でもないこの梅干老爺が腕に花さく昔の香氣、さても其後さるほどに二人が中の苦勞さん〴〵今時の青い奴等は夢にも知らぬ戀の瀧津瀬、どッ〳〵と組んで落ちたる果に、我は逆さに吊ッて鼻血も出ぬまで、彼女は身の皮剝いで寒中に浴衣一枚の末まで、もう斯うなれば抱いて死ぬより外には分別もない筈を、持ッて生れた小三の意氣地、死晴に今一度この柳橋の橋杭折れるほどの形見を殘して後と、つまり詰ッた年の暮に一夜あく

れば泣き騷ぐ鴉金やら蔦金を八所借の血證文で天晴れ仕上げた春着三枚、およそ古今の華奢を盡して、正月の二日、をりしも日本橋の河岸を歩めば、問屋々々の門口に勢ひ込んで初荷の大鮪を引き斬る男ども、や、死んだと思ッた火の車の小三が通るぞ、あたら女の痩せ鹽梅どいつが業だ畜生め、おい小三、定めし膏ッ氣も拔けたらうに幸ひ鮪の切肉くれべいかと叫べば、こぼる〻愛敬ほ〻と笑うて立ち寄りながら、流石は河岸氣質の御親切、あの人ゆゑに此ごろは干物も叶はぬ世話小町、どうか芳志にあづかりたいといふ、その舌の根が憎いとて斬り放したる鮪の頭に、荒繩うち通して拋け出せば、小三そのま〻肩にひッかついで見返りもせず、生命と壁一重の血證文かいて作りあげたる春著三枚に黑血ぽた〳〵の勢ひ、やれ待ッた、日本一の大姉エ、あいつあのま〻歸して河岸の男が立つものかと、二十三軒の問屋より積み出したる損料金が小判で六百兩、されど小三も我も互に戀と色との諸分さま〴〵するほどの事を仕盡

したる今更、つゞかぬ他人の慈悲で行末の皺くちや面を睨み合ふのも野暮、さりとて浮世なまくらの端た心中と一事に唄はるゝも無念心外、こゝは此儘無事に分れて、男持つまい、女持つまい、誓文々々心と心の俱死せんと、その六百兩くわッと撒き散らして柳橋の夜晝三日さわぎの暇乞ひして後、人知れず秋の十五夜てりわたる月に小舟を漕き出して、ところも變らぬ首尾の松影、こゝで小三が一世一代の音じめ小唄の一節、やがて三味線と撥とを水に投げ込んで葬れば、我も男の一腰、親重代の脇差とッて水底に沈め、また漕ぎ戻して曉ちかき兩國の岸に上ると其まゝ西東、おさらば去らば、わかれて後に風の便りを聞けば、相州小田原在の親類が許に十年あとまで機を織ッて暮せしとぞ、昔ながらの月も月、水も水なり、我たゞ世に生きて、

勘助老爺が曉かけて昔の戀を語りつゝ、網にかゝりし三味線の撥を涙と共に持ち歸

りし翌日、兩國百本杭に小唄うたうて一文二文を貰ひし女乞丐の死骸うさあがりぬ、さては、折角の長物語うその皮となッて何の甲斐なく、忽ち三人の男に押寄せられて流石の老爺どこへやら逃げ出しぬ、

浪六全集（第十二編）終

大正十五年二月十日印刷
大正十五年二月廿日發行

八軒長屋續篇
定價金貳圓

著者　村上信
發行者　東京市日本橋區本石町三丁目十四番地　加島虎吉
印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　上村新輔
印刷所　株式會社博文館印刷所

不許複製

發賣所
東京市日本橋區本石町三丁目　電話大手一二三六番　振替口座東京一七四四番　至誠堂書店
東京市日本橋區住吉町二番地　電話浜花一四九〇番　振替口座東京一六三六番　至誠堂第一分店
東京市本郷區本富士町二番地　電話小石川七五〇三番　振替口座東京一六九四番　至誠堂第二分店

浪六全集

縮刷

浪六先生の傑作

興味津々の快著

第一編■當世五人男■

第二編■黑田健次■

第三編■上田力■

第四編■倉橋幸藏■

第五編■川上三吉■

第六編■吉田雄藏・花車品さだめ■

第九編■人間學■

第十編■八軒長屋■

第十一編■八軒長屋後篇■

第十二編■八軒長屋續篇■

新式ポイント組
袖珍箱入美本
各冊金二圓
（郵税十錢）

550
57

終